

平成 24 年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	24K05	氏名	中郡 裕暁
研究主題 —副主題—	「文学的な文章教材の指導における初任者教師の認識とその支援」 —若手と中堅・ベテランの授業イメージの違いから—		
所属校	足立区立湊江小学校	派遣先	玉川大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>本研究は、文学教材の指導における新任・若手教師と中堅・ベテラン教師がもつ授業の認識の違いを中心に調査、分析し、新任・若手教師にどのような支援が必要か明らかにすることを目的とする。</p> <p>文学教材の指導に困難を感じる要因には文学教材を巡る様々な背景がある。国語科教育の歴史的背景、その中での文学教育の位置付け、文学教材の指導法や読みの方法の実践における様々な議論などである。さらに、国語科でも従来の「読解力」よりも機能的、実用的な PISA 型読解力育成に重点が置かれるようになってきたという事情もある。</p> <p>このような背景から、新任・若手教師は何が正しいのか、どう指導すればよいのか分からないという状況にあり、ますます新任・若手教師は、文学教材の指導に困難を感じ、支援を望んでいると考えられる。</p> <p>本研究は、次の三つを目的とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 文学教材の指導において、教師がどのような点に困難を感じているのか。 2 新任・若手教師と中堅・ベテラン教師では、困難の要因や指導の重点、手だての工夫などにどのような違いがあるのか。 3 新任・若手教師は、文学教材を指導するにあたりどのような支援が必要か。
II 研究の方法	<p>調査研究は、東京都、神奈川県内の公立小学校教師及び教職大学院生で、国語科（文学教材）の指導をしたことのある新任・若手教師（0～4年目）、および中堅（5～10年目）・ベテラン教師（11～36年目）を対象に、質問紙調査を実施した。（2012年11月～12月）</p> <p>質問紙で得られなかった回答やさらに詳しく知るための追跡調査が必要なときは、直接本人からの聞き取りや授業観察で補足した。</p>
III 研究の結果	<p>調査用紙は、17校に配布し、170名分回収した。有効回答は163名で、内訳は若手教師45名（26%）、中堅教師47名（28%）、ベテラン教師71名（42%）である。</p> <p>1 文学教材の指導の困難さ</p> <p>「とても難しい」、「やや難しい」と回答したのは、全体の約81.9%となり、若手の約90.8%が、「とても難しい」、「やや難しい」と回答した。</p> <p>2 困難さを感じる要因</p> <p>ポイントが最も高いのは、児童の学力差など児童について質問した項目（76%）であり、次いで指導の方法や授業形態など指導について質問した項目（65%）、そして、目標の曖昧さなど目標についてきた項目（52%）であった。中でも若手は、「何を指導するか絞りにくい」（目標）、「自分の解釈があつて</p>

	<p>いるのかわからない」(教材)、「教材文の理解が不十分である」(教材)、「児童から多様な考えを引き出せない」(指導)の項目でポイントが高い。</p> <p>3 特に重点を置いている指導事項</p> <p>若手・中堅・ベテランともに「登場人物の心情の変化を読むこと」に重点を置いて指導している。しかし、ベテランでは、より高い「読み」を意識した項目も多いことが分かった。</p> <p>4 実践している有効な指導の手だて</p> <p>若手・中堅・ベテランともに、「サイドラインを引き、登場人物の心情が分かる言葉に着目させること」が最も多かった。また、若手・中堅では、「場面ごとに内容をとらえさせること」が多く、「読み取ったことをクラスで話し合うこと」は、ベテランになるほど多い。</p>
<p>IV 考察</p>	<p>1 文学教材の指導における困難さの原因</p> <p>新任・若手教師は、一つ一つの「教材を教える」ことを意識し、教材が変わる度、目標を達成させるために授業をどう展開するかという困難をもつという教材研究の課題と、用意した発問をただ並べていくだけで、児童の発言(反応)が予測できないなど指導技術に課題があると考えられる。</p> <p>2 文学教材の指導の認識の違いと新人・若手教師の課題</p> <p>経験の浅い新任・若手教師は、重点とする指導事項を意識し指導をしても、発達段階に応じた指導の系統性が認識できていない。話し合いで深めること(一斉指導での読みの交流)においても課題がある。</p> <p>3 新人・若手教師への支援のポイント</p> <p>(1) 教材を分析できる技術を身に付けること</p> <p>新人レベルでは、教材研究をする際、共通の読みの指導技術をもち、どの学年のどの教材で適用できるか自分で教材を分析する(読み取る)力を付けるための支援が有効だと考える。</p> <p>(2) 指導事項を明確にし、指導の系統性を認識すること</p> <p>新任・若手教師には、年間を見通した単元の目標、それを達成させるための指導事項を明確にもつことができるような支援が必要になる。指導事項に合った言語活動が単元を貫いて位置付けてあれば、新任教師レベルでもある程度は目標に近付くため指標とすることができるのではないだろうか。</p> <p>(3) 児童の視点から見た学習指導案(目標)の検討</p> <p>指導者側の目標(どう教えるか)にとらわれないための支援として、学習者(児童)側から見た目標(何を学ぶか)を立てることを意識させる。</p> <p>新任・若手教師には、方法重視の教授モデルから目標重視の教授モデルへの視点の転換を示唆することが支援のポイントになるのではないだろうか。新任・若手教師の困難の原因を明らかにし、新任教師レベルに適した支援の在り方を認識することが現場においての急務だと考える。</p>